

## 9月17日 言葉と土地 in 国

今日の出来事で印象に残ったことは、ブンさんの言った「バンジャムルンに勉強に来るな！リラックスしに来い」という言葉だった。夕方、ナマズとアヒルの養殖とすっぽんの卵の養殖をしているトゥッカーさんのお家で夕食をごちそうになっているときだった。僕らや学生は学校から「研修」とか「サービ斯拉ーニング」という形で来ているが、そうではなく、遊びに・リラクゼーションにと言うのだ。というのも、「もし you (ぼくら学生) が義務的に勉強に来たら、僕らはバンジャムルンにまた来たいとは思わないだろう。だって勉強させられた記憶しか残らないのだから。でも、遊びに来たりリラックスに来たりしたら、楽しい思い出が残りバンジャムルンが好きになって、また来たいと思うだろう。だから、おれはバンジャムルンに勉強に来てほしくない。」思うに、ここでブンさんが使っていた learn という言葉は義務的な勉強を指していたのだろうと思う。それならいやいやするからバンジャムルンにあまりいい思い出が残らない。でも、仮におなじ learn でも好きでやる勉強≒遊びだったら良いのだろうなと思った。そこには嫌な気持ちは残らないから。たしかに、このブンさんの言葉なら学生や研修客も村も win-win の関係だなあと思う。学生は良い思い出が残り、村としても学生がまた来てくれる可能性が広がるし、口コミやブログでおすすめされる可能性も上がる。でも、ここからは僕の勝手な解釈なのだが、リラックスすることによって得られる学びも有るということでもあるのかなあと思った。自分がリラックスしているとき、周りの人がどのように気遣ってくれていたかとか、どんな環境を用意してくれていたのかとか、リラックスできる空間にはどんな条件が有ったのかとかを学べると思う。本当にただ遊びに来るだけでも、そうやって事後的にもしくは反復的に学べることも有るのだろうと思った。

また、ブンさんが「このウィスキーがなくなるころには、言葉が通じなくてもいくらか分かり合えるようになる。」と言っていたのも頓智が効いていると思った。初めは、「飲めばわかる」みたいな適当なことかなあと思った。でも、それだけじゃないだろうと思った。思うに、酒を一本空けるということは、その間には時間が有る。しかもバンジャムルンではそのウィスキーを 2:8 くらいで薄めて飲む。ロックで飲んでがぶ飲みしたりしないので時間がかかる。ということは、その時間には何かしらの話をするだろう。言葉があまり通じなくてもジェスチャーや絵でもコミュニケーションは図れる。その中で、初めは互いをまったく知らなくても、徐々にほんの少しだがわかりだす。酒が減ると反比例して互いの情報が少しずつ増えていく。そんなことを言っているのかなあと思った。

また、トゥッカーさんが言った一言にも反省させられた。「タイに来たならできるだけタイ語を話すようにしなさい」と。ブンさんが英語を話せるので、トゥッカーさんに話をするときもブンさんを通しての会話がほとんどだった。トゥッカーさんが話す少しの英語から話を想像するという感じだった。たしかに、タイに来てタイ人と話すのだからタイ語を話すのが「郷に入っては郷に従え」的な礼儀だろう。タイ語をあまり本格的に学ばずに来

たので使える単語も文章も少ないし、聞き取りもできないことに反省。

「タイに来たのだからタイ語を話せ」。その論理はたしかにわかる。でも、なんでそう言われなければならないかという、答えが思いつかない。また、トゥッケーさんは「もちろん、私（トゥッケーさん）が日本に行ったら日本語を話すようにする！」とも言っていた。なぜ二人の人間が会話をするとき、二人の使う言語を決定するのが国土なのだろうかと思った。そしてなぜ英語なら OK なのだろうか？井上唯が、センターにいるときにタイ人の研修客に話しかけられてタイ語で応対できなかったときに、「タイに来たならタイ語を話した方がよい」と“英語で”言われたそう。英語しか通じないときなら、おそらく英語でも良いのかもしれない。じゃあなんでタイ語を話せなければならないのだろうか。・・・謎だ。当たり前だろと言われてたらそうなのかもしれないけど、腑に落ちない。理由は実践的なところにあるのだろうか。タイで長期間滞在する際に、英語が通じる人とだけ話そうとすると、何かと面倒が起るだろう。また、タクシーやご飯の代金をぼられそうになったときにもタイ語を話せるほうが、ぼられずに済む可能性が高い。友達を作るときにもタイ語の方が英語よりは効果的だろう。また、いま読んでいる本（『ルポ 餓死現場で生きる』）でストリートチルドレンの話が出てきて、彼らの中には公用語を話せないために意思疎通ができず、危険人物と勘違いされて暴力を振るわれるというケースがあるそう。そういう点からもしっかりタイ語を話せた方が良いのかもしれない。でも、「〇〇国に来たら〇〇語を話せ」とだれかが言うとき、それが忠告を示しているようには聞こえない。それがマナーだろ！って感じに聞こえる。このマナー（礼儀）は一体どこから来ているんだろう。いったい誰がそのような意見を唱えだしたのだろうか。そしてそれはどのように広まったのだろうか。でも、先ほどのストリートチルドレンの例のように、話しかけた人間がどんな風貌でどんな態度をしているかによっては、異国の言葉を話す人間に恐怖するので、そのクニの言葉を話した方が、どちらも恐怖せず済むのかもしれない。異国から来た人は外国語を話すことで気味悪がられ暴力を振るわれたりする心配が無く、母国の人は母国語なので意思の疎通を確認できて恐怖せず済む。じゃあ国境を境にして話したらどうなるのだろうか？どちらの国が優先されるのだろうか？興

ちなみにトゥッケーさんのお家では辛い料理のオンパレードで、一つの皿を空けても注ぎ足されるというすばらしいサイクルであった（笑）甘い料理または辛くないけどおいしい料理が無いときの食事は、楽しみなどではなく任務にしか感じられない（笑）おいしいのだが辛すぎるのがしばしばある。タイの辛い料理の難点だなあ。（↓はトゥッケーさん家の料理）

